



うさ本ファミリー

# 楽しく子育て!

～子育て支援コーナー通信～

第97号

発行日

2015年6月19日

(毎月19日刊行)

## 第33回 子育て支援コーナー企画展示

### 「おいしく食べよう! 和の食事

～親子で食育～ が始まりました。

期間：平成27年6月2日(火) ～

平成27年8月23日(日)

### 新しい本が 入りました。

( )内の数字は  
棚の番号です

『働きたいママの就  
活マニュアル 働か  
ないけど働けないモ  
ヤモヤを解消!』  
毛利優子/著  
自由国民社/刊  
2015. 3  
(支援1-1)

『イライラが笑顔に  
変わるなりきり子育  
てのススメ』  
なかしまゆき/著  
学事出版/刊  
2015. 4  
(支援1-5)

『頭がよくなる整理  
術 子どもを伸ばす  
片づけテクニック』  
大法まみ/著  
主婦と生活社/刊  
2015. 3  
(支援2-1)

『へこたれない子に  
なる育て方』  
高濱正伸/著  
プレジデント社  
/刊  
2015. 4  
(支援3-3)



毎月19日は「かがわ食育の日」、毎年6月は「かがわ食育月間」です。それにちなんで子育て支援コーナーでは食育の展示を行っています。(あわせて、Young Generationコーナー、閲覧室展示コーナーでも6月28日(日)まで食育の展示を行っています。)

平成25年にユネスコ無形文化遺産に登録され、世界中から注目を集めている和食。和食は「一汁三菜」を基本型とし、栄養バランスを取りやすく、だしや発酵食品を使ったヘルシーな食事とされています。美しい食事のマナーや、行事食、地元で伝わる郷土料理も含めて、子どもたちに伝えていきませんか?

当コーナーでは、幼児から小学生のお子さんと保護者向けに、「食育の基礎について分かる本」「和食のレシピ本」「行事食、郷土料理の本」「和食の出てくる絵本」など、幼児から小学生の食育に役立つ本、約200冊を展示・貸出します。どうぞご利用ください!

「わくわく! 食育  
パネルシアター」  
を開催しました。

6月6日(土)、香川大学児童文化研究会のみなさんの制作、出演で「わくわく! 食育パネルシアター」を開催しました。朝ごはんを食べること、バランスよく食べることの大切さを教えてくれるおはなしを楽しみました。

# 子育て応援団を紹介します。 第3回

## 高松短期大学 保育学科 准教授 田中弓子先生①

子育て支援に関する研究をされつつ保育所・幼稚園の先生を目指す大学生を指導され、そしてまさに子育て真っ最中（2歳児の母親）でもある 高松短期大学保育学科准教授の田中弓子先生にお話を伺いました。

### Q 1 子育て支援に関する研究を志望された動機

A : 学部では教育学部系に在籍していましたが、先生として生徒たちの前に立つという思いよりもむしろ、教育や子育てに潜む問題について真剣に向き合いたいという思いが強くなっていました。「●●は当然である（それ以上こだわって問う必要はない）」ことが教育や子育ての世界には多いなあ。そういった客観的根拠に乏しい観念を見直すことが、専業主婦や働く母親のみならず広く女性にとって、そして実は男性にとっても生きやすいのではないかと考え、大学院（ジェンダー社会科学専攻）に進学しました。この進路選択にあたり、私の思いを支持し、後押ししてくれた家族の存在は非常に大きかったです。ただ、研究の世界は、事がらに対して誠実さを求められるという点で、妥協が許されない厳しい世界でした。指導していただいた先生方はもちろん、研究室の先輩や同級生からは数知れずの知的刺激を受けました。



「働く母親」が困難に陥る（仕事と家庭生活とのバランスが突如崩れる）時に目を向け、当時はあまり注目されなかった病児・病後児保育（体調不良児は園から帰宅し、当然、誰かが看病しなければならない）をめぐる問題構成を研究していきました。現在では、子育て支援に関わる問題の一つとして位置づけられています。

### Q 2 平成22年度高松市との特定課題共同研究「高松市の働く母親が子育てと仕事の両立の上で抱える苦悩の調査・研究」から分かった点、改善すべき点など。

A : 高松市5地区（東部・西部・南部・中心部・合併町の1ヶ所）の保育所に子ども（0・1・2歳児）を預けて働く母親にインタビューしました。この結果、「育児休業が取得しにくい」「子どもの病気の時休みにくい」「保育料の高さ」などが、今現在抱えている悩みだと分かりました。

高松特有だと思ったのは、近距離に住んでいても、祖父母の援助を得にくいとの回答があった点です。他の地域の調査では、祖父母の援助が得られない理由として「近くに住んでいない」「働いている」という回答が多いので、予想に反した結果となりました。日頃から交流していない場合、子育ての考え方や子どもの対応の仕方が祖父母にはわからないので、困った時だけ頼むというのは頼みにくい結果になるのではないかと思います。

インタビューで印象的だったことがあります。最後の質問で、「今後取り組みたいことは何ですか」と人生の展望について聞きました。それまで積極的に話して下さっていた方が、急に黙り込んでしまい、「考えたことがない」「日々をこなしていくのに精一杯」という返答。全員に聞きましたが、皆同じような答えでした。子育てと仕事に奔走し、毎日をこなすのに精一杯なのだろうと感じました。

提案できることは、親になる前に学校で夫婦で「出産後のことについて」予想のつく限り細部に渡って話し合うことです。「子どもが生まれたら、このようなことが予想されるだろう。それをどのように対応していくか」。必要ならば、周囲（時には夫婦の親・家族）にアドバイスを求めることも大切です。もちろん、保護者がゆとりを持てるように職場や社会が変わっていくのが理想ですが、それを可能にするには、余裕ある人員配置、ひいては経費のかかることなので難しい面もあると思います。ただ、インタビュー中に、小さな工夫で解消できそうな悩みがありましたので、そこから改善することは可能なのではないのでしょうか。（次号に続く）

（インタビューした日：2015年2月5日）